

受賞した作家、朝井まで「阿蘭陀西鶴」（講談社）。「現代に生きる作家べき存在を描いてみた

## 大賞・朝井まかで新作



思うように書けずにつらい思いをした。「一緒にしたらおこがましいけれど、物書きが書かれん苦しさは同じだと思うから」

## 書かれへん苦しさ同じ

の視点から書いた。一見野放図なようで、ふと不器用な優しさをのぞかせる西鶴の素顔が、2人の暮らしの描写を通じて少しずつ像を結んでいく。

西鶴が執筆の壁にぶつかる場面には、書き手としての自身の経験を重ねた。「筆を放したらそこで道は終いになるとわかつてるので、前が見えへん」――。西鶴を読んでいた昨夏、自身も

直木賞受賞で注目される中の執筆になつたが、本人は「いつもと同じですよ」と気にする様子がない。「力んでええもん書けるようなら、いくらでも力むけど」と爽やかに笑った。(柏崎歎)

本体1600円。(柏崎歎)



佐藤慈子撮影

## 新校長に詩人・細見和之氏

### 大阪文学学校 23年ぶり交代

作家の田辺聖子さんや朝井までさんが学んだ大阪文学学校（大阪市中央区）の校長が10月、23年ぶりに交代する。1991年から校長を務めてきた詩人の長谷川龍生さん（86）から詩人の細見和之さん（52）が引き継ぐ。

学校を運営する一般社団法人、大阪文学協会の代表理事は、作家の高畠寛さん（77）から作家の葉山郁生さん（65）に交代する。細見さんと葉山さんは、ともに大阪文学学校の修了生。

8日に会見した細見さんは「文学は生活の糧にはなりにくいやが、生きる糧にはなる。23歳の頃の僕もそうだった。文學のそういうところを改めて考へたい」。葉山さんは「大阪がなんばらないと、九州も名古屋もがんばれない。大言壯語だけれど、地域から世界文学を目指す姿勢があつてい」と語った。大阪文学学校は1954年創立。60周年を機に若返りを図る。初代校長は詩人の故小野十三郎で、細見さんは3人目の校長になる。

(柏崎歎)

## 暗記の日々 山村先生に会い一変

元大阪大学総長・免疫学者 岸本忠三（75）

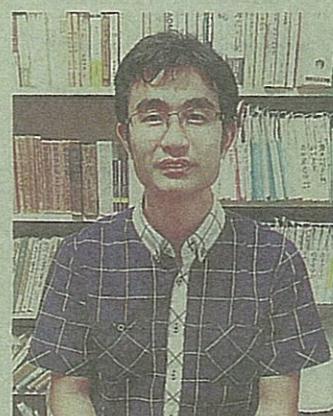
③

## テーブルトーク

京大人文科学研究所准教授

藤原辰史さん（37）

## 「食」に表れる 時代の思想



食を通して、その時代の思想を読み解く人文学者。2年前に出版した「ナチスのキッチン」（水声社）は膨大な資料をもとに、ナチス時代のドイツでは頑強な兵士をつくるため、主婦には厳格な台所仕事が課されていたと説いた。高い評価を受け、第1回河合隼雄学芸賞を受賞した。

島根県出身。山間部の米作農家で

育った経験から、京都大で食と人の関わりを研究対象にするようになった。「食はコミュニケーションの場。ナマのメディアと言つてもいい。一緒に食べると風邪もうつるし、殴り合いだって起きるでしょう。でも、交わされる情報は量も多いし質も高く、その場自体に思想が表れています」

6月に出版した「食べること考え

ること」（共和国）では、米国発祥で日本でも人気を呼んでいるフードコートを、極めて現代的な食事形態として紹介している。「バラバラな価値観を持った個人が、とにかく『集合している』という事実を得られる空間」。一般化している個食を維持したまま、同じ場を囲める食の形だという。

地元の食を重視する各地の動きが活発化し、全国から講演依頼が相次いでいるという。「その土地の食材を一緒に食べながら現地の人と語りあう。それが研究でもあり、楽しみでもあります」(河野通高)

最初は臨床医でしたね  
もと医者になる気はなか

「こんな世界があるのか！」　いつて、終わり。そういう研究

ピカーッと目の前が明るく輝く  
は少なくありません。でも、医

でも、結果的に、僕らが追つ  
ていたのと本庶さんのとは、違  
うものでした。  
僕らは翌年に目標の遺伝子を  
捕まえ「ネイチャー」に論文が  
載りました。これが後に、関節  
リウマチ薬「アクトミラ」につ